ライティングの哲学

書けない悩みのための執筆論

千葉雅也　山内朋樹
読書猿　瀬下翔太

読めばあなたも書きたくなる

執筆論！

書けない＆書き終われない病への処方箋!!

書くのが苦しい4人が「なぜ書けないのか」を熱論！

ライティングの哲学

書けない悩みのための執筆論

千葉雅也　山内朋樹
読書猿　瀬下翔太

星海社

187

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

山内朋樹

なにかを書こうとして、白紙のファイルに向かって孤独にフリーズしているならこの本のページを繰ってほしい。ぼくらも同じように、それぞれの書けなさを抱えながら悩み、苦しみ、もがいている一人の執筆者なのだから。

なにかを書くプロセスのなかで、書き継ぐことが苦しい、途中でやめてしまった、書き終えることができないと、書きかけのファイルを開くことさえできなくなっているならこの本のページを繰ってほしい。ぼくらも同じように、書きかけの原稿をそっと閉じてすべてを忘れてしまいたいと願う一人の執筆者なのだから。

なにかを書き終えて、こんなの誰でも書ける、クソみたいな文章を書いてしまった、これではダメだと、せっかくの原稿をフォルダの奥にしまい込もうとしているならこの本のページを繰ってほしい。ぼくらも同じように、できてしまった原稿を認めることができず、画面の前で絶叫している一人の執筆者なのだから。

とにかく、読みはじめてみてほしい。

*

この本はそれぞれに固有の書けなさを抱えつつも、そのなかでいかに書くか、どうすれば楽になれるか、どうしたら書き終えられるかについて、千葉雅也、読書猿、瀬下翔太、そして山内朋樹の4人が縦横無尽に語りあい、あるいは論じた

ものだ。

ＳＮＳや日々のニュースの炎上騒ぎにびくびくしながら、世間の目を気にして、言われたとおりにちゃんとして、おもてなしの心でもって、誰も傷つけないようマナーをふまえた言葉や振る舞いを身につけて。けれどその果てにあるのは神経症的な自縄自縛と、他者と交換可能な凡庸さではないだろうか？

違和感――「とりあえずまじうっせえ」。

でも目を凝らしてみてほしい。あなたのなかには、あなたの生の傍らには、あなたにしか束ねることのできない荒々しい言葉の渦がある。創造の源泉なんていう上品な喩えでは汲み尽くせないほどばしりが、激流が、濁流が渦巻いている。ぼくらはそう断言する。

ここではたまたま「書くこと」がテーマとなっている。けれどもっと広く柔らかく「つくること」と読み替えてもかまわない。書くことの哲学、あらため、つくることの哲学と！

書くこと、つくることをより自由に、気楽に、気にせずに、言ってしまえばもっと適当にやってしまうこと。ぼくらは、この時代の自縄自縛と凡庸さから、書くことを解放する！　つくることを解放する！

*

とはいえここに収録された2本の座談会は、文章術に長けた精鋭たちが集まり、遥かな高みで編み出された技の数々を披露しあうようなものではない。どちらか

と言えば、どうやって書けばいいのか、どのように書き継げばいいのか、どうすれば書いたものに納得できるのかわからない、地べたを這って苦しみ続けるどうしようもない4人が互いの傷を晒し、悩みを語り、ときに個々の人生の問題にまで踏み込みながら励ましあう、自助グループの記録のようなものだ。二つの座談会に挟まれた4本の文章もまた、それぞれが自分自身の執筆とつきあうなかで書きつけた切実な症例報告として読むべきだろう。

だからここで語られるのは、文章指南や仕事術に見られるような効率化のテクニックではないし、こうすれば書けるといったハウツーでもなければ、世間で吹聴される「たったひとつのこと」でもない。

しかしだからこそ、ここでは書くことにまつわる本質的な探求がなされている。ありえない解像度で、書くことにまつわる悩みのニュアンスの多様さに向きあっ

ている。それはときに哲学的で精神分析的な考察にまで達してしまうのだけれど、具体的な悩みのひだに沿って語られているから心配はない。必要なのは知識ではなく、なにかを書きたい、つくりたいという願いである。

*

ぼくらは、少なくともぼくは、この対話をとおして、あるいは収録された症例報告を書くなかで、なにか救われたように感じている。なぜだろうか。そのような効果を期待してはじめた対話ではなかった。それなのに書くことについてずいぶん気楽になったと、心の底から励まされたと、感じている。

書くこと、ひいてはなにかをつくることは、ようするに生きることだ。書くことは結局のところ自分自身と向きあい、その限界を認め、諦(あきら)めることだし、これま

でに受けてきた傷やわだかまり続けるしこりも含めて許すことだ。書くことの悩みは自分自身の生と深く結びついているがゆえに絡(から)まりあっていて、表に出すのは恥ずかしく、涙なくして語ることはできない。しかしだからこそ、それを晒しあい、迎え入れるこの場には、底抜けに明るい笑いが満ちている。

気楽な気持ちで5人目の席についてほしい。椅子は用意している。気後れするなら少し離れたところから見守ってくれてもいい。ぜひ覗(のぞ)いていってほしい。

ここには書くことの、つくることのすべてが詰まっている。

目次

はじめに　山内朋樹　003

座談会その1

挫折と苦しみの執筆論

SECTION.1　「書くこと」はなぜ難しいのか？　018

SECTION.2　制約と諦めのススメ　057

SECTION.3　「考えること」と「書くこと」　088

実践

依頼：「座談会を経てからの書き方の変化」を8000文字前後で執筆してください。

断念の文章術　読書猿　118

散文を書く　千葉雅也　138

執筆

書くことはその中間にある　山内朋樹 153

できない執筆、まとめる原稿
——汚いメモに囲まれて　瀬下翔太 177

座談会その2 快方と解放への執筆論

SECTION.1　どこまで「断念」できたか？ 198

SECTION.2　「執筆」の我執から逃れ自由に「書く」 239

あとがき　千葉雅也 264

座談会 その1

挫折と苦しみの執筆論

本書は「書く」ことを仕事の一つとしながら「書けない」悩みを抱えた左記の４名が、新たな執筆術を模索した軌跡を記録しています。

千葉雅也

１９７８年、栃木県生まれ。立命館大学大学院先端総合学術研究科教授、哲学者。ジル・ドゥルーズを中心とするフランス現代思想の研究、美術・文学・ファッションなどの批評、小説など、領域横断的な執筆を展開している。

山内朋樹

１９７８年、兵庫県生まれ。京都教育大学教育学部准教授、美学者、庭師。フランスの庭師ジル・クレマンの研究、庭や街のフィールドワーク研究を軸に、現代の庭の可能性を理論と実践の両面から探求している。

読書猿

正体不明。読書家。メルマガ「読書猿」で書評活動を開始し、現在はブログでギリシャ哲学から集合論、現代文学からアマチュア科学者教則本、日の当たらない古典から目も当てられない新刊までオールジャンルに書籍を紹介している。

瀬下翔太

1991年、埼玉県生まれ。編集者、ディレクター、NPO法人bootopia代表理事。批評とメディアの運動体「Rhetorica（レトリカ）」の企画・編集を行う。2015年に島根県鹿足郡津和野町（かのあしぐんつわのちょう）へ拠点を移し、2021年春まで高校生向け下宿を運営。

この4名が互いの執筆術を紹介しながら書けない悩みを打ち明け合った「座談会その1」、それから2年が経過したのちに変化した執筆術を書き下ろした「執筆実践」、書き下ろされた原稿を読み合い熱論した「座談会その2」の全3部で、本書は構成されています。

まず、本書の出発点となったのは、山内さんの「WorkFlowy使いを集めてそれぞれのトピックの立て方や執筆段階での使い方を公開するという企画があれば需要があると思う。というか他の人がどうやって使っているのか具体例をなるべくたくさん見たい」（2017年12月21日）というツイートです。「どこかウェブメディアで、思想や批評、文学分野などのアウトライン・プロセッサ使いを集めて、みんなのアウトラインを公開する記事をやりませんか？　座談会も収録して、とか。」（2017年12月21日）と千葉さんが引用リプライで応え、アウトライナーを利用して執筆を行っている読書猿さん、瀬下さんを交えて次ページから掲載する「座談会その1」を2018年4月15日に行いました。

このように、アウトライナーと呼ばれるツールを使用した執筆方法を見せ合い、自分がより楽に執筆するためのヒントを得ようという動機から始まった座談会でした。しかし、議論は「うまく書けないせいで負った傷を見せ合う」といったナイーヴな悩みを打ち明ける赤裸々な述懐から始まり、「書けない悩み」の解決方法を検討するのみならず、書くことの本質の探求へともつれこんでいくのでした。

文＝星海社編集部

アウトライナーとは？

アウトライナーとは、文書の全体の構造を階層的に作成・編集し、また細部を加筆・編集する形式をとる文書の作成ソフト・ツールです。

ＰＣで文書を作成するソフトとしてはWordが一般的ですが、最初から最後までひと連なりの文章が表示される形式をとるWordとは異なり、アウトライナーは見出しと記述をセットとして取り扱う階層化された文章が表示されます。

たとえば文章を書き出す前に、目次や構成案を書き出し編集する――見出しの階層化とグループ化を行い全体の構造を統御する――ことがあります。

アウトライナーでは、文書全体の階層構造がツリー状に表示され、つねに編集位置を把握できます。

ゆえに「細部の記述」のみでなく、先述のような「全体の構造の統御」も思考しながら文書を記すことへと、使用者を向かわせます。

同一階層内で順序を入れ替えたり階層を上下させたりする機能も存在し、アウトライナーはとくに構造的な長文を執筆する際に有用なツールとされています。

SECTION.1

「書くこと」はなぜ難しいのか？

——本日は「アウトライナー座談会」と題して、千葉雅也さん、山内朋樹さん、読書猿さん、瀬下翔太さんの4名にお集まりいただきました。この企画は、山内さんのアウトライナーについてのツイートを受けて、千葉さんが「アウトライナー使い」を集めて使い方や執筆論について議論を交わしたらおもしろいのではないか、というツイートをされていたことがきっかけとなって実現したものです。

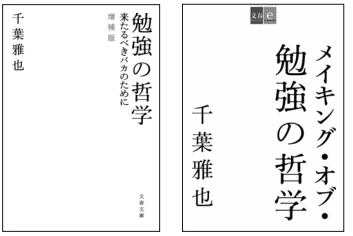
山内　ちょうど、千葉さんと二人でアウトライナーについてやり取りしてたんですよね。

千葉　ぼくがアメリカにいたときですね。

山内　おそらくその頃、紙媒体に先駆けて配信されていた千葉さんの『メイキング・オブ・勉強

の哲学』電子書籍版[*1]を読んだ後だったと思うんですが、そこには千葉さんが『勉強の哲学[*2]』を書かれたときの実際のアウトライナーの使い方がスクリーンショットを交えて掲載されていたんですね。それを見て、自分はアウトライナーを使っているといってもまったく使いこなしていなかったんだということがわかったんです。

当時ぼくは、まずは普通に箇条書きをつくって並べ替えをしながらまとめていましたが、その作業をしているうちに個々のトピックが膨らんでいき、最終的にはひとつのトピックがひとつの段落になるまで書き加えてしまっていたんですね。つまりはアウトライナーで原稿をほとんど書いてしまっていた。



千葉　最終原稿を書いてたんですか!?

山内　ほぼ最終原稿ですね。それをWordに移して整理する、という流れでした。

＊1　千葉雅也『メイキング・オブ・勉強の哲学』（文春e-Books）勉強論『勉強の哲学』を制作論として振り返る副読本。第二章では『勉強の哲学』のアイデア形成のためにツールをどう使ったかが具体的に説明されている。

＊2　千葉雅也『勉強の哲学　来たるべきバカのために』（文藝春秋）「勉強とは、自己破壊である」をコンセプトに独学で勉強するための方法論、実践例を案内する勉強論。増補版が文春文庫から刊行されている。

千葉　それはぼくとは全然違いますね……。

山内　そんなときに千葉さんの使い方を見たので衝撃を受けたんですよ。それで、人のアウトライナーを覗き見ることができれば自分の使い方も相対化されて変わってくるし、なによりいろんな使い方を見るのは楽しそうだなーと思って、無責任に「そんな企画があったらいいな」って呟いたんです。そしたら、どういうわけか自分のものを晒すことになってしまった（笑）。

千葉　さて、今日はぼくはやや司会的に振る舞おうかと思っています。今日集まっているみなさんは、執筆や調査に関わるなかで、「方法」をそれぞれ意識されている人たちだと思います。まさにそのことをまとめて書いてくださっているのが、読書猿さんの『アイデア大全』[*3]ですね。だからここでは、お互いの、方法についての考え方

＊3　読書猿『アイデア大全』（フォレスト出版）〈新しい考え〉を生み出すための方法を、科学技術、芸術、文学、哲学、心理療法、宗教、呪術など、多くの分野・古今東西から渉猟し集めたテクニック集。個々の技法の実用性だけでなく、成立背景まで案内されている。

を照らし合わせるのがいいのかな、と。

前提として、方法を考えるということは、書くことに関する問題や苦悩があって、そこを突破するために行っているものだと思います。ニーズがあるから、方法を考える。だから、それぞれに固有の悩みや、悩みに応じて導き出された解法などを紹介していきながら、個別の話と普遍的な話を行ったり来たりできれば、と考えています。

自己紹介、あるいは「書くこと」との付き合い方について

千葉 まず自己紹介をすると、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、千葉雅也といいます。いまぼくは、立命館大学の先端総合学術研究科という大学院で教えているんですが、ここは90年代から大学に設置され始めたような領域横断系の研究科で、思想とか社会学とかいろいろな専門家がいます。だから学生も多種多様なのですが、特にうちには立岩真也（たていわしんや）さんという、福祉、とりわけ障がいの社会学に強い人がいて、その人のところに集まってくる、マイノリティの問題や労働問題、差別の問題といった「倫理的」なイシューを扱うようなタイプの、社会系の学生が比較的多い。そういったなかで、ぼくは文化論のほうを担当し

ていて研究指導をしている、というのが基本的な仕事です。大学院生がどうやったら自立した研究者になれるか、というのがぼくの仕事の課題で、調査研究の仕方、まとめ方、論文の書き方を教え、彼らが書いてきたものに対して「てにをは」レベルから赤ペン先生のように直したり、ということを普段やっています。

ぼくの『勉強の哲学』という本も、ビギナーに対してどうやって研究を教えていくかを普段から考えていて、そのなかで出てきたアイデアを拡張して「勉強」というキーワードで包んで出した、というものです。普段の教育活動と直結しているものです。

基本的には哲学・思想をベースに、文化論的なものも展開していますが、とにかく「書く」ことが仕事なので、「書くこと」そのものについてもいろいろと考えています。

瀬下　島根県から来ました、瀬下翔太といいます。ぼくは島根県西部にある津和野町というところに住んでいます。そこでNPO法人bootopiaという団体をつくって、高校生向けの下宿屋を運営しています。

……といっても謎すぎると思うので少しだけ説明すると、ぼくが暮らす町には、島根県立津和野高等学校という高校があります。この学校は、森鷗外（もりおうがい）や西周（にしあまね）が通っていた藩校・

養老館が母体でもあり、町の人たちもすごく思い入れがあるんですね。ところが少子高齢化の影響で生徒数が減ってしまって、統廃合されてしまうかもしれない。そこで「地方で学んでみたい」という都市部に暮らす中学生を集め、入学してくれた生徒たちを県の寮や、うちのような下宿で面倒をみています。

千葉　画期的なプロジェクトですね。しかし、大変な責任ですね、それは……。

瀬下　そうですね。こちらに暮らすあいだは保護者の代わりというか、家族のようなところもあるため、大変な面もあります。ただ、真面目なことばかり考えていたわけでもなくて、事業を始めたきっかけのひとつには、生徒たちがいない時間に本でも読んでのんびり過ごしたい……という悪い考えも（笑）。高校生は、昼間は学校ですから。

千葉　なるほど！

読書猿　いいなあ!!

瀬下 生徒にも読書好きの子がいるので、楽しいですよ（笑）。ぼくはもともと東京で仕事をしていたのですが、島根県に移住していまの事業を始めてみて、地域活性化と教育って意外と相性がいいんだなあと気づかされました。

千葉 文科省に好まれそうな人材だと思う！（笑）

瀬下 いやはや（苦笑）。下宿の話をしたのは、みなさんよりも「書くこと」に対してややアマチュア的だということを伝えたかったからです。少しライターや編集の仕事をしたり、「Rhetorica（レトリカ）」[*4]という同人をやったりもしているのですが、文章に関しては本当に悩みばかりです。いま特に困っているのは、思い入れの強い対象について書こうとしたり、自分が書きたい文章表現に取り組んだりすればするほど、うまくいかなくなってしまうということです。文科省ではありませんが、町役場に提出する事務的な文書をつくるときには、そ

＊4　Rhetorica（レトリカ）　思想／建築／デザインを架橋しながら批評活動を展開するメディア・プロジェクト。インディペンデント・マガジン『Rhetorica』を発行している。

れほど苦労しないのですが（笑）。というわけで、今日はこうした悩みや課題を共有したり、自分がアウトライナーのようなツールを使って、それをどのように乗り越えようとしているかを紹介したりできたらと思います。どうぞよろしくお願いします。

読書猿　〝インターネット老人会〟から参りました、読書猿と申します。瀬下さんは91年生まれと伺ったんですが、91年ってぼくがMacintoshを買った年だったんですよね。それで97年くらいからですね、「読書猿」というメールマガジンの配信を始めました。

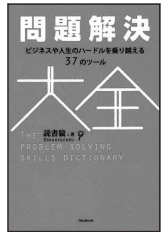
千　葉　97年からやっていらっしゃる!?

読書猿　はい。メルマガは10年ほどやってからしばらく休んでいるんですが、同じく「読書猿」の名前でブログ[*5]を始めて、約20年インターネットでものを書いてきました。本も2冊、『ア

＊5　ブログ「読書猿Classic:between/beyond readers」

イデア大全』と『問題解決大全[*6]』というものを書かせていただきました。これは知的生産的な本だと思われているんですが、ぼくは「苦手科目の克服」が趣味でして、自分の苦手な部分ばっかり書いているんですよ。今日の「書くこと」というテーマはもっとも苦手なことのひとつなので、これは行かなきゃいけないだろう！　と。この苦しみを分かち合いたいと思って来ました。

ところで、91年にMacintoshを買ったと言いましたが、Actaというアウトラインプロセッサ[*7]のソフトが当時発売されていて、すぐに買ったんです。



千葉　ああ！　ありましたね！

読書猿　だからアウトライナーとの付き合い自体は長いんですが、使ってはうまくいかずに諦めて、しばらく他のものに浮気して、また戻ってきて……を繰り返して現在に至る感じでして。

＊6　読書猿『問題解決大全』（フォレスト出版）困難や窮状を「問題」として捉え、その対処法や目標へ到達するための方法を集めたテクニック集。『アイデア大全』と同じく技法の実践例や有用性だけでなく、その歴史的・思想的背景まで紹介されている。

＊7　Acta　1986年にリリースされたMacintosh用のアウトラインプロセッサ。

みなさんも紆余曲折あったと思いますので、どうやって現在にたどり着いたかの話ができたらいいなと思います。企画的には、むしろその紆余曲折のほうがおもしろい気もしますね。

文章を書くのは本当に苦手でして、だから……書けたときが奇跡なんですよ。奇跡なので、それがどんな言葉であっても、いま書いているものとはなんの関係もないフレーズであってもメモしておかないといけない、その奇跡が次にいつ出てくるかわからない。それがいまの、原稿の書き方のベースになっています。ただ、苦手なんですが書きたいものはたくさんあって、計算したら、どうも生きてるあいだに間に合わないな、と（笑）。

千葉 ブログだけでも、いろいろなジャンルのネタが膨大にありますよね。

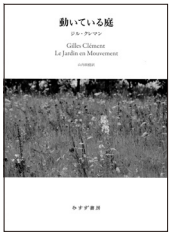
読書猿 だからもうちょっと楽に書きたいので、そのヒントをいただけたらとも思っております。よろしくお願いします。

山内 山内朋樹です。京都教育大学の美術領域専攻というところで、美学や美術史を教えていま

す。ぼく自身がもともと庭師だったこともあり、庭づくりや剪定なんかも教えています。フランスにジル・クレマン[*8]というおもしろい庭師がいるんですが、その人についての研究がとりあえず専門です。学生の頃はインスタレーションの制作をしていて、その流れで石とか樹木といった具体的なモノで空間を構成する庭に興味を持って、ぐぐっと庭師にシフトした、という経緯です。

今日の話も広義の制作を扱うものだと思うので関連してくると思うんですが、美術ってたんに一人で制作していても、それだけで求められるというものではないですよね。学生の頃はなおさら。期日も要請もないわけですからつくるにあたっての可能性は権利上無限にある。白いキャンバスを前にして、あるいはなにもない空間を前にして、制作者はそこになにを置いてもいいし、その開始時点を延々と後退させることもできる。初手に必然性を持たせる手がかりがほとんどなくて、なかなか手をつけることができなかった。

ところが庭の世界に移ってみると、もちろんフル稼働している職人集団のなかに



*8 ジル・クレマン　現代フランスの庭師。小規模な庭から都市公園まで幅広いプロジェクトを手がける。実践にもとづく庭園論のほか、小説等も発表している。邦訳書に訳＝山内朋樹『動いている庭』（みすず書房）。

挫折と未練のアウトライナー

雇ってもらったからなんですが、施主がいて、予算が決まっていて、期日が決まっている。そしてモノはしばしば動かしがたい。たとえば何トンもある巨大な岩を、数人がかりで半日かけて据えたとします。そうすると「うーん、もう少しこうしたい……」と思っても、もはや動かせない。いや、できないことはないんですが、それにかかる労力と費用はすごいし、すでに全員汗だくで疲れ果てている。樹木なんかも大きいのを入れてしまったら、イメージと多少の違いがあってもある程度で仕舞いにして次に行こう、となる。こうした具体的な制約のなかでつくっていく庭のスタイルが、学生の頃の自分には美術とは随分違っているように見えて新鮮でした。ほんとは美術もきっとそうなんですが。

ともあれ作業するうえでの具体的なモノなり判断材料なりが周囲をとりまいていて、そのなかで動いていく。そこに庭の具体性とおもしろさがあるように思えたんですね。文章を書くという行為も、どうやって制約をつくりだし、配置するかが重要になってくると思うので、今日はそんな話もできればなと。

読書猿　では、傷を見せ合いますか（笑）。うまく書けないせいで負った傷を。

——その「準備」ではないですが、使っている、あるいは使ってきたツールについて、順番に伺っていってもいいでしょうか？

読書猿　先ほど名前を挙げたActaは、ごくシンプルな、本当にアウトライン機能だけのようなソフトだったんですが、最初は麗しい関係を築いていました。階層化できる、畳める、改稿のたびに自由に動かせる！　こんなにいいものがあるのか！　と。アウトラインプロセッサとしての最低限の機能だけだったんですけど、それが嬉しくて、Actaばかり使ってたんですよ。ToDoリストもちょっとしたメモも、なにもかもActaで書いていた時期が1、2年くらいありました。

千　葉　まとまった長い文章も全てActaのなかで完結できたんですか？

読書猿　できました。山内さんのように……（笑）。実はいまもそうで、2冊の本はアウトライナー

で書きました。使ったのは別のソフトで、Tree[*9]という、フリーの基本的な機能しかないアウトライナーです。

千　葉　すごい！　でもTreeって、横に展開していくんじゃなかったでしたっけ？

読書猿　あれは切り替えられるんですよ。普通のアウトラインプロセッサ的な、箇条書きとインデント、という使い方もできるんです。インデントのほうだけ使って、書いたものをコピペしてメールで送って、編集さんが整える……というふうにやっていきました。しかも、ひとつの章ごとに送ってたんですね。

千　葉　章ごとに？

読書猿　後で「しまった！」と思うことも多いんですけど、なにか制限をかけないと、延々書き続

＊9　Tree　日本の開発者によるMac専用のアウトライナー。横にのびるツリー表示が特徴。2021年現在はリリースサイトが閉鎖されている。

けて太っていってしまうので。

山内 わかります。

読書猿 どこかで切らないといけない。だからそういうやり方でやらせてくれ、とお願いして、大抵はそうやってつくりました。

山内 そのやり方そのものがすごくアウトライナーっぽいですね。

千葉 一冊全体っていう最終原稿を自分の手元でつくってるんじゃなくて、まとめは編集者に投げちゃってるのもおもしろいですね。

読書猿 アウトライナーを使い始めた頃から困っていたのが、アウトラインが太っていってしまう「書き癖」でした。最初の大雑把なところから分割していくトップダウン的な使い方をしていて、どんどん詳細になっていくんですが、本来はそこで刈り取ることもしないといけ

ないじゃないですか。でも、アウトラインを増やして太らせることを続けて、ディテールが爆発してしまって、アウトプットの文章に辿り着けなくなり、アウトライナーから少し離れました。Actaを使い出してから2〜3年の、93〜94年頃なので、まだ「読書猿」を始めていない時期ですね。それが1回目の挫折です。その後、Inspiration[*10]というソフトに浮気しまして。

千葉 ああ、ありましたね！　電球のアイコンの。

読書猿 そうそう。これは、いわゆるコンセプトマップとかの図を描くソフトなんですよね。Inspirationがよかったのは、図を繋げて描いていけるんですが、それをそのままアウトラインに変換したり、もう一度図に戻したりする機能があったことですね。アウトライナーにはまだちょっと未練があって……（笑）。結局、Inspirationは3年ほど使いました。それからしばらくは、そういうツールを使わずにエディタだけで書いていました。「読書猿」メ

*10 Inspiration　アイデアプロセッサー・プレゼンテーションツール。情報の優先順位付けや関連付けを行いマップ、プロセス図、フローチャートなどの作図に利用された。2021年現在もWindows用、クラウド用が提供されている。

ルマガの時代はだいたいエディタなんですね。ひとつひとつが短いので、書けるときにわーっと書いてしまっていて、あまり構造を考えたりする時間はありませんでした。

その後、大学院にもう一度行くことになりまして、論文を書かなきゃいけないと。卒論は手書きの時代だったので、コンピュータで論文を書かないといけないという初の状況に四苦八苦しつつ、どうしても構造的な文章を書く必要があって、アウトライナーに戻ってきたわけです。そのときは、思いついたことを殴り書きで書き出して、ちぎって項目＝箇条書きにしてからアウトライナーに入れて、アウトライナー上で「くっつくのはこれとこれで……」という、ボトムアップ的というか、下から組み上げていくようなやり方をしていました。ただ、これはめちゃくちゃ効率が悪かった……。

ちなみに、論文はWordで出せというんですね。Wordの悪口は始まったら2時間くらい止まらなくなってしまうので、ここではやめておきます（笑）。

このような変遷を経て、いまはアウトライナーに戻ってきました。

いかに「制約」をつくり出すか

山内　ぼくは、最初の頃はやっぱりWordで（笑）。構想も手書きメモなんかでちょっとは考えていたと思うんですけど、とにかくWordで頭から書き出していく。しかし途中で大変なことになってきて、書いては消し書いては消しを繰り返しながら少しずつ使える部分が増えていく、という書き方をしていました。たとえば1、2、3節があるとすると、だいたい3節あたりでポシャってしまうような残念な書き方でしたね。アウトラインっていう発想がそもそもありませんでした。

千葉　ぼくもそうだった！　多くの大学院生がそうだと思う。

山内　少し安心しました（笑）。その後、Evernote[*11]を使うようになってからは、Evernoteにメモをとったり資料を溜めたりして、それを参照しながらWordで書く形になりました。アウトライナーを使うようになったのはけっこう最近で、ここ2、3年のことなんですよ。ようやくEvernoteとWordのあいだにアウトライナーが入りました。

*11　Evernote　「すべてを記憶する」をキャッチコピーとするメモアプリ。テキスト、手書きメモ、画像、PDF、Webクリップ等を一元保存し一括検索することができる。

千葉　アウトライナーは最初はなにを使ったんですか？

山内　最初からずっとWorkFlowy[*12]ですね。それまでは、アウトライナー的なことはやったとしてもEvernoteでやってました。Evernoteで箇条書きをつくって入れ替えたりして、それを見ながらWordでいきなり起こしていく。庭の論文を書くことも多いので、そのときは庭の図面だったり図表だったりも一緒にEvernoteに入れておいて、それを見ながら書き起こしていっていました。とにかくぼくはWordからできるだけ離れたい人間で。あれは発狂するんですよ！

読書猿　発狂しますよね！（笑）

山内　まずは見た目で発狂するんです。たとえば青土社の『現代思想』に寄稿することになった

*12 WorkFlowy　"Organize your brain."をキャッチコピーとするシンプルなアウトライナー。階層的なアウトラインはもちろん、箇条書きやメモなどにも使うことができる。

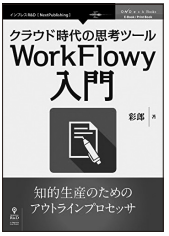
とすると、なぜか原稿そっちのけで『現代思想』誌面とほぼ同じフォーマットになるように見た目をいじり倒してしまうんですね、Word だと。「なにやっとんやろ?」とか思いながら（笑）。ですので Word に到達するのをできるだけ遅らせることがぼくの第一命題です。

瀬下 書き上がった原稿がすでにあって、それを Word にコピペするだけ、という感じにしたいですよね。

山内 そうですそうです。

読書猿 ところが、そんなにうまくいかない。

山内 そうなんですよ。それで WorkFlowy をあいだに挟むようになったんです。彩郎（いろどろう）さん[*13]や倉（くら）



*13 彩郎　ブログ「単純作業に心を込めて」で WorkFlowy を中心としたデジタルツールの効果的使用にもとづく知的生産の技術を紹介。著書に『クラウド時代の思考ツール WorkFlowy 入門』（インプレスR＆D）。

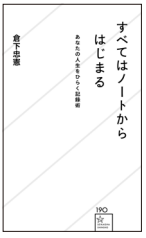
下忠憲（しただのり）さん[*14]の記事なんかを参考にしながら。WorkFlowyを使い始めてよかったのは、とにかくユーザーインターフェイスが固定されていること。そもそもアプリ側の自由度が低いじゃないですか。あれがもう本当に助かりました。

読書猿　制約がないとどれだけ苦しいかの証左ですね。

山内　ぼくのなかでは「制約の創造」こそがとにかくテーマで。

千葉　それですね。ぼくも美術出身だからひじょうに共感します。

山内　WorkFlowyは見た目が固定されているというその一点がまず大きいですね。使い方としては、まずは思いついたことをどんどん放り込んで箇条書きをつくっていき、並べ替えをしながら、最初に言ったように徐々に段落化していく。それがほとんど



＊14　倉下忠憲　ブログ「R-style」でEvernoteやScrapboxといったデジタルツールの効果的使用にもとづく知的生産の技術を紹介。著書に『「やること地獄」を終わらせるタスク管理「超」入門』『すべてはノートからはじまる　あなたの人生をひらく記録術』（ともに星海社新書）など。

完成原稿になったらWordにコピペして出す、という時期がありました。

とはいえ、これを言い出したらキリがないんだけど、WorkFlowyにはトピック間の並べ替えの自由度の高さがあるじゃないですか。なので完成原稿近くまで持っていくような使い方をすると、この新たなフレキシビリティにまた発狂しそうになるんですね。「ここはこうしたほうがいいんじゃないか？」ってとこがいっぱい出てくる……。

千葉 順序の合理性とかね。

山内 そうそう。そういう使い方にうんざりしていた頃に、ちょうど『メイキング・オブ・勉強の哲学』と「レヴィ＝ストロースはざっとドラフトをつくるんだ」という趣旨の読書猿さんのブログ[*15]を読んで、またちょっと書き方を変えることができました。現時点ではEvernoteはほぼ倉庫化していて、普段思いついたことはMemoFlowy[*16]というWorkFlowy

*15 ブログ「読書猿」：書きなぐれ、そのあとレヴィ＝ストロースのように推敲しよう／書き物をしていて煮詰まっている人へ

*16 MemoFlowy　WorkFlowyへのテキスト入力に特化したメモアプリ。

用のメモアプリに書いてWorkFlowyに投げるようにしています。そうしてWorkFlowyのInboxトピックに溜まってきたものをたまにざっと分類して、原稿依頼やなにか〆切が来たら頭に日付をつけてプロジェクト化する。

ちょうどいいタイミングでstone[*17]というこれもユーザーインターフェイスが限定的かつ美しいアプリが出たので、いまはWorkFlowyの箇条書きでだいたいのところまで進んだらstoneで一気にドラフトを書くようにしています。あとは『メイキング・オブ・勉強の哲学』で紹介されていたWorkFlowyでの高解像度分析をとり入れて、stoneのほうでざーっと書きながら詰まったところはWorkFlowyでもう一度考える。

千葉 アウトライナーで自己分析、論点の分析をするということですね。

山内 ですね。というわけでぼくのアウトライナー人生は短いです。最初はいまいちよくわからなくてけっこう放置していた時期もあったので、ちゃんと使いだしてからは1年くらいですかね。

---

*17 stone　日本語を書くことに主軸を置いたシンプルな外観のMac専用テキストエディタ。

千葉　WorkFlowyよりも前の、それこそActaまでは古くないけど、OmniOutliner[*18]なんかは使ってなかったんですか？

山内　使ってないですね。OmniFocus[*19]は使ったことがあるんですけど、ややこしすぎて。

千葉　ああ、GTD[*20]の。

読書猿　あれ、いろんなことができすぎますよね！　だからぼくはファイル変換だけに使ってます。他のところから持ってきて、なんでも読み込みたいとき。

---

*18　OmniOutliner　アウトライナー。現在「OmniOutliner 5」がリリースされている。

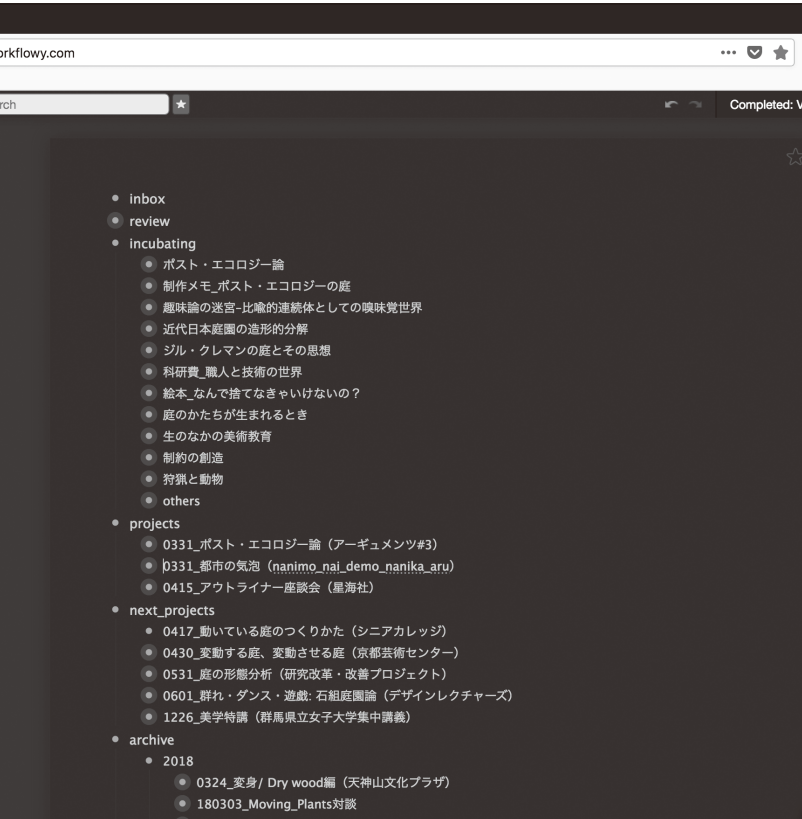
*19　OmniFocus　OmniOutlinerをリリースしているアプリソフト開発会社The Omni Groupによるタスク管理アプリ。GTDに最適化されている。

*20　GTD　Getting Things Doneの略。コンサルタントのデビッド・アレンが提唱したタスク整理・管理の技法。タスク＝「やらなければいけないこと」を収集→処理→整理→レビュー（更新）→選択・実行の5ステップでストレスフリーに消化することを目指す。

一同　なるほど……！

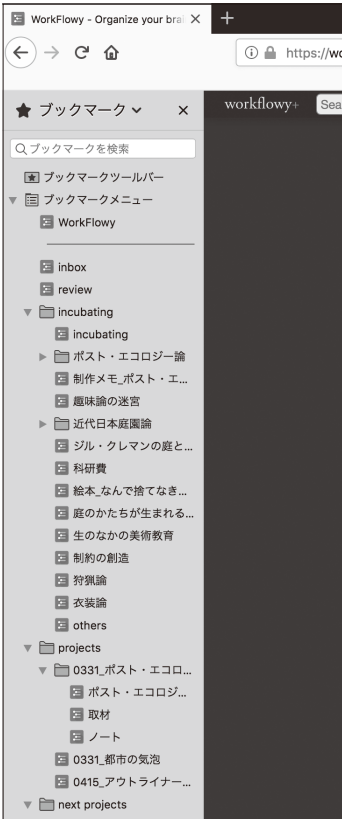
山内　ともあれ、ぼくにとってはユーザーインターフェイスが固定されていて、かつ美しければベストなんですね。

千葉　インターフェイスが固定、有限化されているというのは、あまり言われないけど大事なんですよね。でもって、ちょうどよくキレイな感じだとなおよい。要するに、キレイな部屋で仕事したい。



山内　〆切が近くなってきて「はよ書かな！」みたいなときに限って形式をいじり始めてしまうってことないですか？　試験前日になぜか部屋の大掃除を始める子みたいに。「脚注のポイントはやはり9より8なのでは？」とか「やっぱりこのフォントを試してみよう」とかやっちゃう。

千葉　やりますよね。ぼくも『ユリイカ』の原稿を書くために、同じフォント、イワタの「明朝体オールド」[*21]を買いましたから（笑）。



山内さんのWorkFlowy画面。進行中／着手予定のプロジェクトなどが並ぶ。（2018年3月撮影）

フリーライティングの衝撃

*21　イワタ明朝体オールド　活字の雰囲気を持つレトロ系明朝体。

遡（さかのぼ）っていうと、ぼくの実家はデザイン会社だったんですよ。地方の広告代理店……広告代理店と言っても、スーパーマーケットのちらしとか、地元の会社のパッケージとかですが、途中から少しインターネット系の事業もやり始めた、そういう会社でした。その会社はぼくが修士のときに潰れてしまって、実家が破産してしまい、それからしばらくは大変でした。

実家がデザイン会社だった時代に、父親からいろいろな影響を受けました。１９９１年、ぼくが中学に入った頃にMacintosh LCが出て、それを買ってもらってMacで遊び始めたんですね。ＤＴＰ[*22]を会社に導入したこともあって、中学生というかなり早い時期からAldus PageMaker[*23]を使えていて、夏休みの自由研究なんかはPageMakerでデザインして出していたんです。あ、いや、最初はエルゴソフトのEG Book[*24]だったかな。

＊22　ＤＴＰ　Desktop Publishingの略。ＰＣでデータ作成し、プリンターで印刷する出版形式。かつては活版印刷や写真植字が行われていたが、とくに日本では２０００年代からレイアウトデザインソフトのAdobe InDesignを使用したＤＴＰが印刷・出版の主流となった。

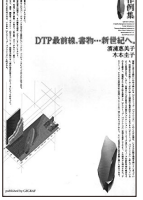
＊23　Aldus PageMaker　アルダス（現アドビ）がリリースしていたＤＴＰソフト。のちのAdobe PageMaker（最終バージョンは２００１年リリース）。

＊24　EG Book　１９８７年にリリースされたＤＴＰソフト。

瀬下 文章そのものだけでなく、誌面にも関心があったのですね。

千葉 とにかくDTPソフトではけっこう遊んでいて、だから、最初はEG BookかPageMakerで書いていたことになりますね。その後、高校時代にエッセイとか読書感想文を書いたときには、QuarkXPress[*25]を使ってました。全部縦書きで。ぼくが論文っぽい文章を書き始めたのも、当時の人文系の本がかっこよかったことの影響があります。戸田ツトム[*26]系のデザインで。

実際、小学生のときには、「DTPで出しました」という戸田ツトムの『森の書物』[*27]を父親からプレゼントされて、「これを見て勉強しろ」ってDTPの英才教育を受けたんです（笑）。だから、脚注を付けたりするとカッコいい、というところを



*25 QuarkXPress　Quark社がリリースしているDTPソフト。

*26 戸田ツトム　グラフィック・エディトリアルデザイナー。2020年没。編集者・松岡正剛が設立した出版社・工作舎へ入社し、その後独立。DTP黎明期に卓抜した装幀・エディトリアルデザインを手がけたことで知られる。装幀を手がけた書籍に島田荘司『眩暈』（講談社）、ジル・ドゥルーズ『差異と反復』（河出書房新社）など。

*27 戸田ツトム『森の書物　DTP最前線、書物…新世紀へ。』（ゲグラフ・河出書房新社）　戸田ツトムによるDTP作例集。刊行当時は非常に先駆的だった、PCでデータ作成された書籍。池澤夏樹とのコラボレーション『都市の書物』（太田出版）、DTPとCGを駆使したアートブック『DRUG　擬場の書物』（太田出版）とあわせて書物（DTP）三部作とされる。

入り口にして、そこから研究者の道に進んだという感じすらあります。

――脚注を付けたかった？

千葉 そう！　とにかく脚注が付けたかった！　後注とかじゃなくて、傍注とかをカッコよく付けたかったんですよ。とにかくぼくはガワから入っていって、そこからだんだん中身が伴っていった感じの研究者人生なんです。もともと美術作品をつくっていたこともあって、見た目にどうしても左右されてしまう。最近は、とにかく見た目に左右されずに文章を書く方向に大きくシフトしましたが、文章の視覚性に対するこだわりを脇に追いやることにはだいぶ苦労しました。

というのが昔の話で、一時期からはWordを使うようになりました。エディタはJedit[*28]を使っていて、大学の頃はJeditで書いてWordで提出するという流れでしたね。だけど大学1、2年の頃の駒場のレポートはまだ、Quarkを使って縦書きで出してました（笑）。3、4年からだんだん「アカデミックっていうのはそういうことじゃないんだ」と気づき

*28 Jedit　アートマン21がリリースしているテキストエディタソフト。

始め、Wordで横書きで出すようになった。卒論もWordで横書きだったかな。あ、卒論のときは一時的にNisus Writer[*29]ですね。でも、結局Wordに落ち着いた。Wordを使う凡庸さにはだんだん馴染(なじ)んでいったけれど、WordのなかでもDTP的なことをどうしてもやってしまうんです。字詰め調整とか、実際の掲載媒体と同じレイアウトにしようとか。

Evernote登場前は、やっぱりゼロから、頭から書こうとしていてすごく苦労していました。当時のアイデア出しは手書きですかね。ノートに箇条書き的なメモを出して、あとはぶっつけ本番です。白紙でWordで書くか、エディタで書いていました。Evernoteの登場後は、資料をまずEvernoteに溜め込むようになり、かつEvernote上でメモをとるようになった。原稿の書き始めもEvernoteになりました。Evernoteで第1節くらいは書いてしまう。その段階でWordに持っていって、続きを書くというスタイルです。

スタートダッシュをまずEvernoteで、みたいな期間が長かったですね。ただ、スタートダッシュにもものすごく苦労したんですよ。まず最初の3、4行を書くのに、3、4日くらいかかってしまう。その3、4行がかっこよく決まらないとダメ。それはすごく美学的な基準なんですけど、まずかっこいい文章じゃなきゃいけない。そのうえで意味的にも

*29 Nisus Writer　Mac用ワープロソフト。

完璧でなければいけない、というハードルを満たしてくれないと先に進めない。バッカバッカ煙草を吸いながら、3日くらいすごい顔をして書くんですよ。でもそれができると、最初の完成度に促されるようにして、不思議とその先が出てくる、みたいな書き方でした。

次もそういうやり方でできるだろうと信じてやっていたんですが、だんだん苦しくなっていって、これじゃ続かないなと。書き方を変えなければという自覚はずっと持っていて、その後２０１６年からWorkFlowyを使うようになります。

とはいえ、そのときは書くためにアイデア出しをするという独立したプロセスがなかったんですよね。適当にノートに書くくらいで。アイデア出しをアイデア出しとしてやっていませんでした。強いていえば、それをやっていたのがツイッターだったんですよね。ぼくはツイッターに仕事上のアイデアをかなりそのまま書いていて、それを発酵させて原稿にしたりしていたので。ただ、ツイッターって人目に触れるし、始終ツイッターで考えていることを書くわけにもいかないから、ツイッターの代わりになるものが欲しかったんですよ。それで「ツイッター」「代わり」とかで検索したときに、なぜかWorkFlowyが出てきた（笑）。

山内　Google すごいですね（笑）。

千葉　本質的な検索結果ですよね。それで WorkFlowy にたどり着いたんですよ。飛ばしてしまったけど、その前には章立てを考えるために OmniOutliner は多少使っていました。

読書猿　構成を考えるため？

千葉　それが大きかったです。ツイッターのようなアイデア出しとしては使っていませんでした。WorkFlowy は、1か所に全部アウトラインを入れておくという、Evernote のようなワンライブラリーな発想がまずおもしろいなと思いました。最初は彩郎さんの詳細な解説で使い方を知って、その後 Tak. さんの『アウトライナー実践入門』[*30]を読んで衝撃を受けたんです。アウトラインプロセッサには章立てをつくるものというイメージがあったんだけど、Tak. さんの本には、自由に書いて、好きなように「シェ

*30　Tak.『アウトライナー実践入門　「書く・考える・生活する」創造的アウトライン・プロセッシングの技術』（技術評論社）WorkFlowy や Word のアウトライナーとしての使い方、アウトライン・プロセッシング＝書きながら考え、考えながら書く技法と実践を紹介している。

イク」しながら使うんだ、大雑把に使うんだということが、つまりフリーライティングのすすめのようなことが書いてあって、目から鱗でした。フリーライティング的にアウトライナーを使うというのは、ぼくにとってアウトライナーの存在価値をまったく変えてしまうくらいの衝撃があったわけです。

自分が書いているのは「しょぼいもの」

瀬下 ぼくが最初に意識して使ったツールは、高校生の頃にダウンロードした紙copi[*31]です。これはEvernoteのようなソフトウェアで、ウェブ上のコンテンツを素早くローカルで取り込む機能を持っていました。当時のぼくは紙copiを使って、おもしろいニュースや2ちゃんねるのスレッドを保存して編集する……いわゆるまとめブログを運営していました。当然ながら、メインのコンテンツを自分で執筆するわけではありません。誰かの書いたもの

*31 紙copi　1999年から公開されているウェブスクラップソフト。なお、製作者のソフトウェア作家・洛西一周氏は、ScrapboxやGyazoといった知的生産ツールを開発するNota株式会社でCEOを務めている。

にちょっとしたコメントを付したり、ＨＴＭＬやＣＳＳのタグを打ったり。文章に能動的に関わる体験は、これが初めてだったように思います。

Wordやメモ帳のようなエディタも使っていましたが、紙copiで原稿をおおよそ整えたあとは、ブログサービスのエディタ上で直接テキストを触っている時間が長かったです。プレビューを押すと、すぐに最終的な見映えを確認できるところがおもしろくて。テキストのガワに強い関心があったという意味で、千葉さんと似ているところがあるかもしれません。

自分で文章を書いてみたいと思うようになったのは、そのあとです。浪人していた頃にはてなダイアリー[*32]や2ちゃんねるで東浩紀（あずまひろき）さんを知り、いろいろ批評文を読むようになったことがきっかけです。それからは、人文系の人が書くようなカッコいい文章を書いてみたくなりました。

千葉　蓮實重彦（はすみしげひこ）や松浦寿輝（まつうらひさき）みたいに、長く読点で続けていく感じですか？

＊32　はてなダイアリー　株式会社はてなが運営していたブログサービス。２００５年頃からインターネット上の議論空間として影響力を持ち、「はてな論壇」とも呼ばれた。２０１９年にサービス終了し、「はてなブログ」へ統合された。

瀬下 そこまで息が長いものでなくとも、どこか文芸批評らしい文章を書いてみたいなと。ただ、大学に入ってから何度か見様見真似で書いてみたものの、全然ダメでした。自分の文章は一文が短くて文の構造が単純すぎるし、文と文の連なりは箇条書き的で、逆にそれを気にすると今度は接続詞が多くなりすぎてしまう。ブツブツ切れて、バラバラです。

ぼくは自分の文章のこうした特徴を、ずっと「パワポ」みたいだと表現していました。それを2年前くらいにブログに書いたら、[*33] 千葉さんが反応してくださって。

千葉 あの記事はすごく参考になりました。

瀬下 ありがとうございます。「パワポ」という言葉は、はじめ先のように自分の文章の悪い部分を指すために使っていました。しかし、いまはポジティブな意味で使っています。「パワポ」には、いままさに自分が生成しつつある文を「しょぼいもの」といったん割り切る機能があるからです。ビジネスマンが、ちょっとした文法の誤りや誤字脱字を気にせず、

＊33 ブログ「ほんのめも」：文を生成することが辛いひとの文章執筆プロセス

適当にPowerPointに打ち込んでいる文と同様に、自分が書いている文もしょぼい。それでもいいのだ、ひとまず書けるものを書いておけばいいんだから……そんなニュアンスです。些細なことのようですが、「パワポ」という言葉のおかしみも、気楽にやればいいんだという気持ちを支えてくれるように思います。

現在では、まず「パワポ」をつくるつもりで執筆を始めるようにしています。ツールとしては、WorkFlowyのトピックやツイッターのフォーム、iPhoneのメモ、Keynoteのスライドなど、気が向くところにひたすら文字列を打ち込む。「パワポ」がある程度の分量になったら、テキストエディタのmi[*34]やScrivener[*35]といった本格的なエディタにコピペして、既存のメモを編集しながら追記していくような形で執筆を進めます。ちなみに、このやり方で書くようになってから、批評文ではありませんが、少し息の長い文章も書けるように

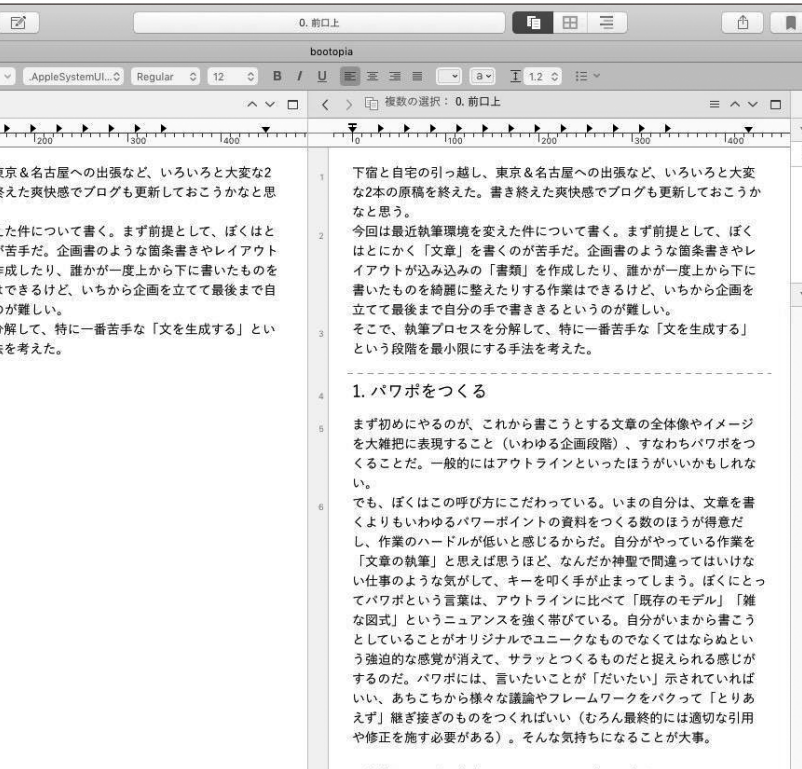
＊34 mi　macOS用のテキストエディタ。コーディングに役立つ機能を備えるが、検索・置換や正規表現にも優れており、文章執筆や編集にも便利。

＊35 Scrivener　文章執筆に特化したアプリケーション。いわゆる本文を書くことだけではなく、アイデアの整理から資料収集までをサポートし、多くの作家や研究者に愛されている。あまりに多機能なツールであるため、向井領治『考えながら書く人のためのScrivener入門［ver.3対応 改訂版］小説・論文・レポート、長文を書きたい人へ』（ビー・エヌ・エヌ新社）という入門書も出版されている。同書ではSF作家の藤井太洋氏やミステリ作家の天祢涼氏、そして千葉さんのインタビューも掲載されている。

なってきました。

千葉 長く書くんだったら、アウトライナーじゃなくてエディタでもいいんじゃないですか？

瀬下 いきなりエディタに向き合うと「さあ、この真っ白な紙に、君の作家性をぶつけてごらん」みたいなことを言われている気がしてきて、なにも書けなくなってしまうんですよね。伝わるかわからないですが、WorkFlowy のトピックくらい狭々しくて、ちょっと事務的なUIの場所のほうが安心するといい



ますか……。

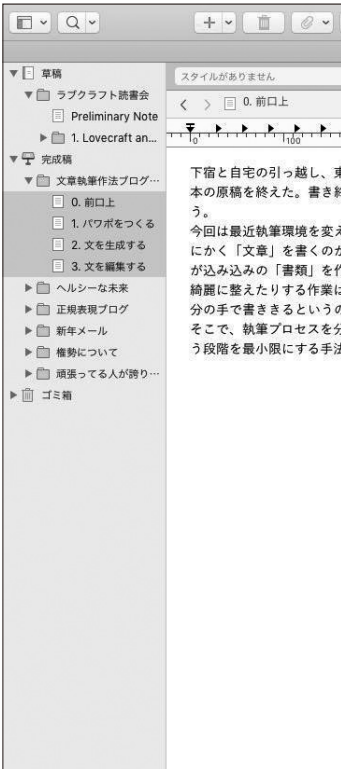
千葉 なるほど！

読書猿 わかるわかる。

山内 メモの延長みたいにしたいんだ。

千葉 作家的な文章を書きたいんだけど、「仕事の文章と作家的な文章のあいだ」みたいな視点がある。自由な作家に羽ばたくための補助輪みたいなものとして、トピックがあるということでしょうか？

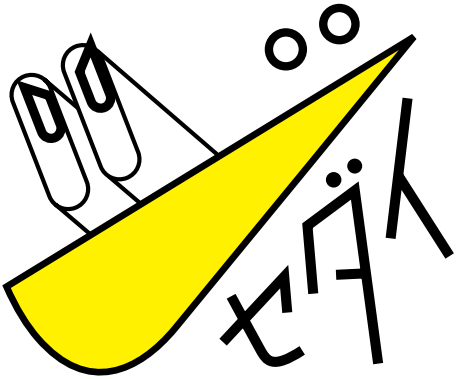
瀬下 まさにそうですね。トピックを補助輪として使うようになって、だいぶ自由になりました。原稿に取り掛かる際に、300〜500字くらいのユニットをサッとつくれるようになったので。



瀬下さんの「パワポ」記事執筆過程。ここでは Scrivener を使用。（2018 年 3 月撮影）

千葉　３００～５００字続いたら、そこそこ量ありますよね。

瀬下　はい。いままでは１ツイート分、１４０字も書いたら限界でした。最初に数百字まとまった内容があると、書き進めやすいです。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!